

## 「言葉への自覚を高める」和歌の学習指導 (中学3年生)

## —Yチャートを利用して—

武久 康高<sup>1)</sup>, 今村 有紀<sup>2)</sup>

1) 高知大学教育学部

2) 高知大学教育学部附属中学校

## "Raise Awareness of Words" Through Learning Waka Poems

## (3rd Grade of Junior High School) : Using the Y Chart

TAKEHISA Yasutaka<sup>1)</sup>, IMAMURA Yuki<sup>2)</sup>

1) Faculty of Education, Kochi University

2) Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kochi University

## 要 約

和歌を詠むとは、自分の心の「揺れ」にふさわしい言葉を探し求め、それを形にする言語活動のことである。そのため和歌の読解では、詠歌主体が自らの心の「揺れ」をどのようなものとして捉え描き出しているのか、そこでの言葉の選択や組み立てを吟味することが求められる。こうした読解活動は、「言葉への自覚を高め」つつ和歌という言語活動の本質に迫るものであり、「言葉による見方・考え方」を育て働かせる授業づくりに寄与するものと考えられる。本稿は、以上のような考えをもとに行った和歌の授業についての報告とその考察である。具体的には、和歌の読解学習におけるYチャートの意義の検討や高知大学教育学部附属中学校で行った授業概要の報告、およびYチャートを用いた話し合い活動の結果みられた生徒たちの読みの変容の要因について論じている。

## キーワード：「言葉への自覚を高める」、Yチャート、和歌学習

## 1 はじめに

歌人である俵万智氏は、「短歌を詠む」ということについて次のように述べている<sup>1)</sup>。

短歌を詠むはじめの第一歩は、心の「揺れ」だと思ふ。どんなに小さなことでもいい、なにかしら「あつ」と感じる気持ち。その「あつ」が種になって歌は生まれてくる。(中略)／しかしせっかく宿った種も、そのままにしておいては干からびてしまう。短歌を詠むとは、感動の種を言葉に育てあげることなのだ、とも言えるだろう。／自分の心が「あつ」と揺れたら、ただ揺れっぱなしにしておかないで、もう一度丁寧に見つめなおす。短歌を作りはじめて私は、たとえば平凡な「あつ」であっても、自分にとっ

てはかけがえのないものだ、とを感じるようになった。引用箇所では、「あつ」という心の「揺れ」を種として歌が生まれてくること、しかしそのためには、この感動の種を言葉として育てあげなくてはならないことが述べられている。なお、ここでいう「感動の種を言葉に育てあげる」とは、自分の心の「揺れ」を丁寧に見つめなおし、その「揺れ」にふさわしい言葉を与えていくことである。そしてその際、俵氏は、たとえ現実を離れてでも自分の感じた「揺れ」に近づく言葉を選ぶべきだと指摘しているのである<sup>2)</sup>。

このように俵氏は、短歌を〈作者が自分の心の「揺れ」を見つめ、その「揺れ」にふさわしい言葉を与えたもの〉と捉えている。こうした考えを参考にすると、短歌やそ

の学習について、次のように整理することができよう。  
○短歌を詠むとは、漠然とした自分の思いや感覚（心の「揺れ」）にぴったりとくる言葉を探し求め、それを形にする言語活動の謂いであること。

○そのため短歌の読解では、詠歌主体が自らの心の「揺れ」をどのようなものとして捉え描き出しているのか、そこでの言葉の選択や組み立てを吟味することが求められること。

○叙上のような読解活動は、「言葉への自覚を高め」つつ短歌という言語活動の本質に迫るものであり、「言葉による見方・考え方」を育て働かせる授業づくりに寄与するものと考えられること。

本稿では、こうした考えをもとに稿者と高知大学教育学部附属中学校・今村有紀教諭とで実践した和歌の授業について報告する。授業では、上記の短歌観に基づく読解学習や話し合いの活動、鑑賞文の作成を通じて、生徒が「言葉への自覚を高める」と共に、各自が和歌を読解する観点を知り、その観点を使って他の和歌も読み解けるようになることを目的とした。

以下、次節では和歌の読解学習におけるYチャートの意義について指摘し、第3節では授業者である今村が授業の概要とその考察、さらには改善点等を述べる。第4節では、個人の読解学習で作成したYチャートの記述とグループでの話し合い後に作成した鑑賞文の内容との相違から、本学習の意義について考察する。

## 2 和歌の読解学習とYチャート

和歌の読解学習について考えるため、持統天皇の次の和歌を例として取り上げたい。

春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山  
(万葉集・巻1・28)

中学校の教科書にも教材として採録されている本和歌は、詠歌主体のどのような心の「揺れ」が詠まれているのだろうか。

本和歌のうち初句と二句では、「春過ぎて夏来たるらし」といった「夏の到来」が歌われている。「らし」とは「根拠や理由に基づき推定する意を表す」(ベネッセ古語辞典) ところから、この後の「白たへの衣干したり天の香具山」が「夏の到来」の根拠として示されていることが分かる。つまり、「天の香具山」に「白たへの衣」が干してある状況を見て〈春が終わり夏が来たんだな〉と実感した、そうした「夏の到来の発見」に詠歌主体は「あっ」と心が揺れたのである。本和歌の組み立てから、まずはこのように読み取ることができる。

では、ここで詠歌主体の心を揺らした「あっ」の内実

とは、一体どのようなものだったのだろうか。このことを検討するために、俵氏の次の文章を引用したい<sup>3)</sup>。

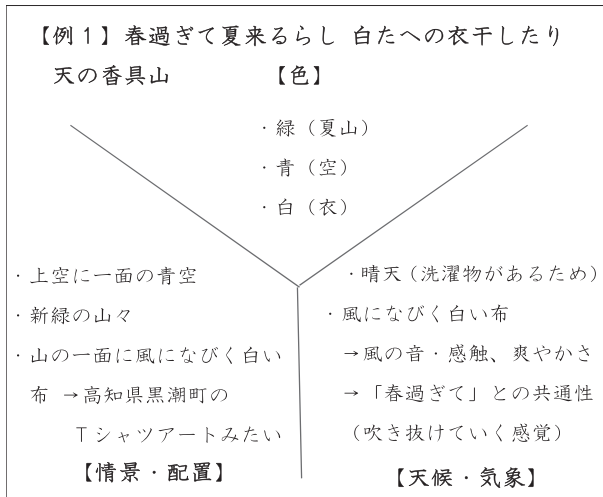
心の揺れを伝えるためには、百パーセント現実に忠実である必要はない、ということ。わかりやすく言えば、嘘もあり、ということなのだ。／短歌は、言葉による表現である。日記や身の上話とは違う。(中略)／(引用者注—恋人に料理をほめられた時の)心の揺れを整理すると「ちょっとしたできごとが嬉しくて、その日を記念日と名づきたい気持ち」とでもなるだろうか。恋とはそういうものだ、と思う。／この揺れを形にしてゆくわけだが、はじめは私も、素直に現実のできごととのなかから言葉を探してみた。これで、パツとうまくいくこともある。(中略)／が、それでうまくいかなかったら、あるいはそれ以上にふさわしい言葉が見つかったなら、現実を離れても「揺れ」に近づくものを選ぶべきだろう。／(中略)心の揺れは、たしかにほんとうに私の心に宿ったもの。けれど、それが言葉というかたちになる過程では、現実から離れてゆくこともある。気どった言い方をすると「現実よりも真実を」ということなのだ。

ここで俵氏は、自分の心に宿った「揺れ」が言葉というかたちになる際、そこでの言葉は自分が体験した現実のできごとから離れる場合もあると述べている。これを「春過ぎて」歌に即して言えば、本和歌の作者が、実際に〈白たへの衣〉が干してある「天の香具山」を見て「夏の到来」を感じたとは限らない、ということである。そうではなくて、ここでの作者の営みとは、何らかのきっかけで感じた「夏の到来」の感覚(心の「揺れ」)にふさわしい言葉を探し求める。そしてその結果として選ばれたのが、〈白たへの衣〉が干してある「天の香具山」を見て「夏の到来」を感じた」という表現であった。よって、我々が行わなければならない読解とは、例えば〈白たへの衣〉が干してある「天の香具山」の景やわざわざ加えられている「春過ぎて」という表現を通じて、一体どのような「夏の到来」のイメージや感覚が読者に伝えられようとしているのか、それを分析することである。

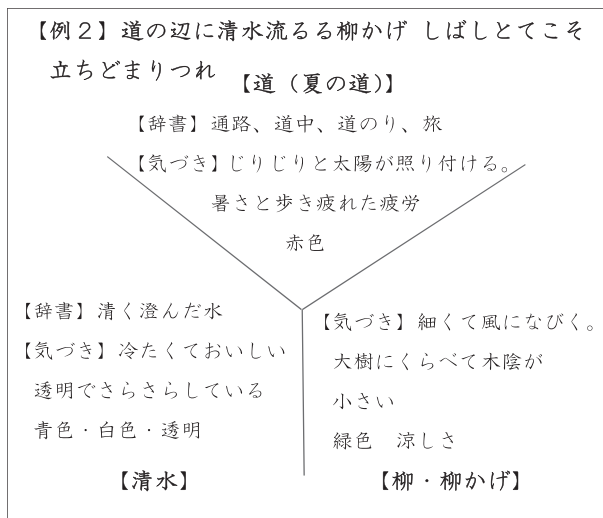
その際、より深く古典世界を学ぶ高等学校の「言語文化」や「古典探究」といった科目であれば、「歌ことば」としてそれぞれのことばが和歌世界でもつ意味を参照しつつ検討することも必要であろう。しかし稿者は、中学校での和歌学習においては、読者である現代の中学生の感覚や経験に引き付けつつ各表現が担うイメージを想像豊かに解釈することも大事であると考える。

そこで本実践では、鑑賞文を書かせる前に行う読解の段階でYチャートを利用した。Yチャートとは、分析す

る対象についての気づきを、3つの視点からそれぞれ書き出していくための思考ツールである。視点を定め、かつそれを3つに制限することで、なかなか気づきを書けない中学生にも考えることを容易にする。「Yチャートの『視点』が、多面的に鑑賞させるための制限となる」というわけである<sup>4</sup>。例えば、「春過ぎて」歌では次のようなYチャートの作成が考えられる。



【例1】では「色」「情景・配置」「天候・気象」という視点を設定した。その上で、自らの経験に引きつけつつ各視点から読み取れること、想像できることを書き出していった。なお、視点の設定は上記のように任意に行っても良いが、そうすると一方で、記述される気づきが和歌の表現から離れてしまいがちになるという欠点がある。そのため授業においては、「この気づきはどの表現から読み取れることなのか」といった内省を生徒に促すような教師の働きかけが重要だと考えられる。そのため和歌によっては、3つの視点には和歌中の表現を設定し、それぞれ気づきを書かせるという方法も考えられるであろう（【例2】）。



【例2】は、これも定番教材である「道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ」（新古今集・夏・262・西行法師）について、「道（夏の道）」「清水」「柳・柳かげ」を視点として作成したYチャートである。それぞれの領域には辞書的な意味、およびそうした意味を踏まえて和歌から読み取れることや想像できることを書き出している。例えば本和歌では「夏の涼」を感じた時の心の「揺れ」が表現されていると考えられるが、そこで「清水」という語の持つ「清く澄んだ水」という意味を押さえさせると、和歌の言葉から「揺れ」のありようを生徒が探っていくための重要な手がかりになると言えよう。

このように和歌中の表現を視点として設定する場合、各視点から書き出される気づきは【例1】に比べ、それぞれの表現を根拠としたものになりやすい。しかしその一方で、「色」や「情景・配置」のように和歌全体のありようを組み立てに関する視点ではないため、そうした観点での気づきは出にくくなる。そのため、それぞれの和歌の特徴や授業のねらいに従って視点の設定を行わせる必要があると言える。

では、【例1】に戻って、あらためて次の問いを考えてみたい。

○ 〈「白たへの衣」が干してある「天の香具山」〉の景やわざわざ加えられている「春過ぎて」という表現（和歌のことば）を通じて、一体どのような心の「揺れ」を描き出そうとしているのだろうか。

上記の問いを考えるために我々はYチャートを用いた。3つの視点から和歌を豊かに読解することで、そうした表現を通じて具現化されている詠歌主体の心の「揺れ」をつかまえるためである。上記のYチャートをもとに、例えば次のような鑑賞文の作成が可能であろう。

【鑑賞文例】 目の前に広がる雄大な夏山の緑。その一面に、昨日までとは異なり、白妙の衣が干してある。それらは吹き抜ける初夏の風になびいており、そうした吹き抜ける風の感覚は、わざわざ「春過ぎて夏来るらし」と「春」が過ぎ去っていく様子を表現しているところからも感じられる。そして上空には抜けるような青空が広がっている。

青と緑と白といった色彩のコントラスト。洗濯物が干してある情景から連想される、初夏の爽やかな風と少しずつ強くなった日差しの感覚。洗濯物が乾く、何とも言えぬ良い香りも漂ってきそうである。

以上のような、視覚や嗅覚、触覚などにも働きかける情景を通じて、爽やかな初夏の到来に対する心の「揺れ」を感覚的に伝える一首となっている。

Yチャートの視点を通じて読み取ったことをもとに鑑賞文を書く。そして最後に、そうした和歌世界を通じてどのような心の「揺れ」を伝えようとしているのかを述べる。Yチャートを利用した鑑賞文は以上のような構成で書くのがよいと考える。

次節では、ここまで述べてきたことを踏まえて行った授業実践について報告する。(以上、武久康高)

### 3 授業の実際とその考察

光村図書「国語3」の教科書を用いて、「和歌を読み味わおう」という単元を設定し、5時間で授業を行った。最初に、教科書掲載の「古今和歌集 仮名序」を読んだ後、俵万智さんの『短歌を読む』の一部分を読んで聞かせ、「和歌とは心の『揺れ』を言葉で表現したものである」という和歌の本質を確認した。そして、この単元では、和歌の作者がどのような心の「揺れ」をどのような言葉で表現しているかを読み取ることを学習目標とすることを伝えた。その後、「春過ぎて……」の歌を取り上げ、Yチャートを用いて多様な視点から和歌を捉え、そこに詠まれている心の「揺れ」を読み取る方法を学習モデルとして見せた。ここでは3つの視点を「色」「情景」「天気、気象」とした。

生徒には、教科書の中から情景が思い浮かびやすそうな次の三首を提示し、一つを選んでYチャートを用いた読解をさせた。

- A 春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ  
 B 道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ  
 C 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

生徒の思考の違いを考慮し、3つの視点から分析し心の「揺れ」を捉えてもよいし、心の「揺れ」をつかんでからどのような言葉で表現されているかを分析してもよい、とした。言葉のもつイメージを膨らませたり、当時の意味を理解させたりするために、1人に1冊古語辞典を持たせた。この個人作業の段階では古語辞典を引く生徒は少なく、言葉の理解が思い込みであったり、元の歌から乖離した解釈になっていたりするものが少なくなかった。3つの視点は、学習モデルをそのまま取り入れたものが多かったが、中には「行動」「音」など和歌に応じて設定できている生徒もいた。

第2時では同じ和歌を選んだ者同士で読み取ったことを交流させる計画であったので、Yチャートの入ったワークシートを回収した。4クラスで同様の実践を行ったが、1クラスはほぼ均等に3つに分かれ、3クラスでは

Bを選んだ生徒がやや少なかった。グループ分けは、1グループが3～4人になるように、席移動が少なく済むように、話し合いが進まないメンバー構成にならないように、を意識して授業者が行った。

第2時では同じ和歌を選んだ者同士で読み取った内容を話し合い、各自鑑賞文にまとめる学習活動を行った。グループでの話し合いは、以下の手順で行わせた。

- ①指定した座席順に、読み取った心の「揺れ」と3つの視点を説明する
- ②他のメンバーは「なるほど」と思ったことや質問を色ペンでワークシートに加筆する
- ③質疑応答
- ④全員の発表が終わったら、作者の意図や和歌の良さについて話し合う

なお、意見が分かれたところこそ話し合うポイントであることを伝え、古語辞典をグループの数、国語辞典を人数分教室前に置いておき、必要ならば取りに行くように指示した。

Aの歌では、「下照る」を太陽が照らしている、「出で立つ」を出発する、「をとめ」を自分の娘と解釈し、娘の旅立ちの歌、娘の成長を喜ぶ歌だと捉えている生徒が多かった。そこで、「下照る」、「をとめ」の意味を古語辞典で調べるように助言すると、「美しいものを重ねている」という解釈に修正された。Bの歌では「清水」や「柳かげ」に注目していたものの、「自然の景色を見るために立ちどまった」と解釈している生徒がちらほらいた。教科書の脚注に「あまりに涼しいので」と書いてあるのを確かめさせ、「ということは、それまで暑かったんだよね。暑さを感じさせる言葉はどれだろう?」と問い、「道の辺」にも注目させた。そこから「作者は何をしていたんだろうね」と問うことで、「散歩していた」、「歩いていた」という答えが返ってきた。後の鑑賞文の中には「歩き疲れていた」と書いたものもあった。Cの歌は、「浦の苫屋」など脚注にほぼ解説が書いてあったのだが、作者の意図を読み取れているのかどうか疑わしかった。作者が夕焼けをバックにした海岸の苫屋を見て「寂しい」と感じている、と捉えている生徒はどのクラスにもいたが、上の句の効果や下の句の美については触れられていなかった。そんな中、ある3人グループが「2人はこの風景を『寂しい』とネガティブに捉えていて、1人は『他のものが何もなく開けた風景』とポジティブに捉えていて、意見が分かれている」と困っていた。『浦の苫屋の秋の夕暮』だけを言いたいんだったら、『花も紅葉もなかりけり』はいらんよね?」と助言すると、3人が黙ってしまった。そこで、「質問を変えるけれど、どうしてこの和歌を選ん



捉えていた。それがグループで話し合うことによって、この和歌は誰が読んでも同じような情景を思い浮かべられるということに気づき、それが魅力であると鑑賞文に書いた。

ここまでの取り組みが今回の研究のメインとなる。以降は、教科書の和歌を掲載順に読み、おおまかな心の「揺れ」を考えさせた後、解釈や表現技法を授業者が説明する形で授業を進めた。その中で、前述の三首の和歌が登場したときに、鑑賞文がよく書けていた生徒を2名ずつ指名し、前で発表させた。

この授業を通して、和歌を読むとき単に現代語訳をなぞるのではなく、言葉から情景を思い描き、作者の心の「揺れ」を捉えることができたのではないかと思う。前述の三首以外の和歌においても、心の「揺れ」を尋ねると現代語訳をそのまま発表するのではなく、読み取ったことを自分の言葉で発表できていた。反省点としては、代表者に前で鑑賞文を音読させた際、声が小さくて全体に伝わらなかったのと、鑑賞文を書いたときから時間が経ち、発表者も聞き手も鑑賞文を書いたときの思いが薄れてしまったことがある。今後同じような授業をする機会があれば、鑑賞文を発表させるタイミングや方法を工夫したい。また、Yチャートを使うことにより読解にどのような効果があったか、グループで話し合うことによりどのような変化があったか、生徒に振り返りを書かせておけば、もっと細かい分析ができたと思うのも実践後感じたことである。(今村有紀)

#### 4 生徒の読みの深まりとその要因

本節では、生徒のYチャートやその後の話し合いを経て作成した鑑賞文を検討することで、本授業の持つ意義について考察したい。

##### ①話し合いで多様な意見に触れることで、心の「揺れ」についての理解が深まっている事例

生徒Cは「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」(新古今集・秋・363・藤原定家)を選択し、以下のようなYチャートを作成している。

###### 生徒C Yチャート

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

###### 【視点① 色】

○黄色・オレンジの空。少しオレンジっぽい海の色

《話し合い中のメモ》空の色：日に照らされて金色、うすぐらい青  
/モミジ：赤色/海辺の色：青

###### 【視点② 情景】

○日の入り、たそがれ、夕暮れの絶景を見ている、苫屋か

###### ら見える海岸の海

《話し合い中のメモ》大きい空に日の入り/夕暮がた/なにもなくなり  
苫屋が海にはんしゃしてひかっている/もうすぐ冬になる  
さびしさ/海辺/1人ぼっち/おちば/風がふく/さっふうけい  
/なぜなにもない海/潮風

###### 【視点③ 気持ち】

○なんともいえない不思議な気持ち

《話し合い中のメモ》風が吹いていてさむそう/さびしい感じ

【視点：時間】夕暮れ/もう暗くなる手前



###### 【心の「揺れ」】

○秋を象徴する物がなくても自然に秋だと伝わってくる

《話し合い中のメモ》春も秋もすぎて冬がちがついている/ここで秋を感じられるのは空だけか/もうすぐ冬になる寂しさ

※《話し合い中のメモ》とは、話し合いの際にCがメモしたものの。

生徒Cは「色」「情景」「気持ち」という視点を設定し、本和歌に見られる「心の『揺れ』」を「秋を象徴する物がなくても自然に秋だと伝わってくる」としている。より具体的には、本和歌で描かれている情景についてCは、〈夕暮れ時のオレンジ色の空や少しオレンジ色の海〉と捉え(視点①「色」視点②「情景」)、それらは詠歌主体に〈何とも言えない不思議な気持ち〉を抱かせているとする(視点③「気持ち」)。そしてそんなたそがれ時の海辺に広がる一面オレンジ色の光景に「秋の美」を感じ、詠歌主体は心を揺らされているというのである。

以上のように初読の段階で解釈したCは、同じく「見わたせば」歌を解釈した生徒D・E・Fとグループになった。そこでの話し合いでは、各自が設定した視点と解釈した心の「揺れ」を説明した後、「作者の意図」「この和歌のよさ(表現のうまいところ)」「意見の分かれたところ」について話し合っている。話し合い後、生徒Cが書いた鑑賞文は以下の通りである。

【生徒C鑑賞文】目の前に広がる雄大な黄金色に染まった空と海。そばにある海岸では冷たい潮風が吹いており、そこで一人さびしくたそがれている作者。

「見わたせば花も紅葉もなかりけり」と「秋の夕暮れ」の2つの対になっているのを見て一瞬不思議に思ったが、作者は美しい秋の終わりかけの様子を表しているとハッとさせられる。

もうすぐ秋から冬になるさびしさと秋だと感じられる美しい夕暮れを想像させてくれる素晴らしい作品だと思う。

生徒Cが最初のYチャートで読み取っていたのは、

〈たそがれ時の海辺に広がる一面オレンジ色の風景〉であり、それを詠歌主体は〈秋の美〉として捉えている、と解釈していた。つまりCは本和歌から視覚的な美しさを中心に読み取っていたわけだが、その後の話し合いを経て書かれた鑑賞文では、こうした視覚的な美とともに、肌感覚の冷たさ（「冷たい潮風が吹いており」Fの意見を参照）や孤独感（「一人さびしく」D・Fの意見を参照）が加えられ、そこでの心の「揺れ」も、〈秋の深まりと冬の近づきの発見〉による「揺れ」として捉え直されている。また、初読の際には、「見わたせば花も紅葉もなかりけり」と「秋の夕暮れ」とが対になる和歌の組み立てを〈「不思議」に思った〉と述べていたが、話し合いの結果、そうした組み立ても、詠歌主体による〈心の「揺れ」を表すための工夫〉として意味づけることができるようになっていく。

つまりCは、個人で作成したYチャートをもとに話し合った結果、和歌を読解するための観点が増え（[前]視覚美（オレンジ）のみ→[後]視覚美（黄金色）+肌寒さ・孤独感）、詠歌主体の心の「揺れ」を叙述に即して具体的かつ豊かに想像できるようになったと指摘することができる（[前]秋を感じた時の「揺れ」→[後]秋の深まりと冬の近づきを感じた時の「揺れ」）。

では、どうしてこのような変容が起こっているのだろうか。その要因について稿者は、分析や話し合いにYチャートを利用したことが大きかったと考えている。

今回の授業では、Yチャートで用いる3つの視点も各個人で設定し、大半の生徒は、例とした「春過ぎて」歌で用いた「色」「情景」という2つの視点を利用していた。そのため話し合いでは、視点を定めた効果的な話し合いができていた（これを読みの深まりとする）。

さらに、もう1つの視点がそれぞれ異なっていたことで（「気持ち」(C)、「天気、気象」(D)、「時間」(E)、「気象」(F)）、結果として自分が気づかなかつた分析の視点を知ることにつながっていた（これを読みの広がりとする）。

今回のYチャートを使った話し合いでは、和歌を分析する2つの視点が共通し、もう1つの視点が各自異なっていた。それが結果として、生徒Cの読みに深まりや広がりを与えることになったと考えられる。

②教師の助言により、和歌を読解したり鑑賞したりするための観点を知り、理解が深まっている事例

生徒Gは「春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ」（万葉集・巻19・4139・大伴家持）を選択し、以下のようなYチャートを作成している。

生徒G Yチャート
春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ

<p>【視点① 色】</p> <p>○桃の花のきれいな紅色。日光がしっかりあたっていて、きらきらしている。</p> <p>《話し合い中のメモ》春のピンク</p> <p>【視点② 情景】</p> <p>○春に娘が親を旅立つ、きれいに晴れている</p> <p>《話し合い中のメモ》女の人立っている／桃の花がさいている道に娘立っている。</p> <p>「をとめ」…成人した若い女性。未婚</p> <p>「園」…草花などを植えるひと囲いの土地</p> <p>【視点③ 心情】</p> <p>○さみしいのと反対に景色のきれいさを詠んでいる</p> <p>《話し合い中のメモ》【視点：天気】晴れ／ぼかぼかー太陽</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>【心の「揺れ」】</p> <p>○娘がでていくのがさみしい。立派になったなあ。</p> <p>《話し合い中のメモ》この瞬間がつづいてほしい／太陽にてらされている景色が美しいなあ。</p> <p>【話し合ったこと】きれいな華やかな言葉をならべて、全力できれいな様子を表現</p>
--

生徒Gは、Yチャートを通じて本和歌から、「桃の花のきれいな紅色」に「日光がしっかりあたっていて、きらきらしている」様子（視点①「色」）、及び「春に娘が親を旅立つ」様子（視点②「情景」）を読み取り、本和歌では「さみしいのと」「景色のきれいさ」とが対照的に詠まれている（視点③「心情」）と解釈している。そしてそこから本和歌に見られる「心の『揺れ』」を、「娘がでていくのがさみしい。立派になったなあ。」と、旅立つ娘を見送る父親のそれとして捉えているのである。

以上のように初読の段階で解釈したGは、同じく「春の園」歌を解釈した生徒H・Iと3人グループになった。そこでの話し合いでは、それぞれが設定した3つの視点と解釈した心の「揺れ」を説明した後、「作者の意図」「この和歌のよさ（表現のうまいところ）」「意見の分かれたところ」について話し合った。話し合い後、生徒Gが書いた鑑賞文は以下の通りである。

<p>【生徒G鑑賞文】春というあたたかな季節の園。鮮やかな紅色に咲いている桃の花。そして太陽のやわらかい光がさす道の先を見ると一人の若い女性が立っている。</p> <p>私は、この和歌で作者が表現している心の揺れは、春という豊かな季節の景色を背景に、立つ女性をふと見たときの、若々しきや美しさだと思ふ。「春の園」</p>
--

「桃の花」「照る道」などの言葉から、満たされた春の情景や、息をのむほど美しく目にうつる女性を写真に撮るように表現している。

生徒GがYチャートを通じて本和歌から読み取っていたのは、〈旅立つ娘を見送る父の寂しさが、美しい景色と対照的に描かれている〉というものであった。しかし話し合い後に書かれた鑑賞文では、「この和歌で作者が表現している心の揺れは、春という豊かな季節の景色を背景に、立つ女性をふと見たときの、若々しさや美しさだと思ふ。」と解釈している。つまり、美しい春の景色と女性の若々しさや美しさが相乗効果を持つ、そんな情景として本和歌を捉え直しているのである。

こうした解釈の変容には大きく二つの要因があると考えられる。一つ目の要因として考えられるのは、同じグループの生徒H・Iの影響である。彼女らは最初のYチャートで、本和歌から読み取れる心の「揺れ」を、「太陽に照らされている景色がとても美しいなあ。」(H)、「この輝きのまま止まってほしいな。この瞬間がずっと続いてほしい。」(I)としていた。つまりG以外の2人は、春の輝くような景色に本和歌の詠歌主体は心動かされたと捉えていたのである。こうした他の班員の解釈は、当然Gの解釈の変容に影響したと考えられる。

また二つ目の要因として考えられるのは、Gの場合こちらの要因が強かったと考えられるのだが、話し合いの際に教師がかけた助言の影響である。授業を行った今村は、「花の園」歌を話し合っている生徒たち(3グループあり)に対して次のような助言をしたと述べている。

「春の園・・・」の歌では、「をとめ」を「我が娘」ととらえている生徒がぼつぼついたので、古語辞典で「をとめ」を調べるように言いました。学校の辞典には「若い未婚の女性」と載っています。そして、グループによっては「桃の花の下に乙女がいるのと、先生ぐらいの年の女の人がいるのとではどうだろう？」といった言葉をかけました。

また、「照る」を「太陽が照らしている」と解釈している生徒が少なくなかったので、古語辞典で「下照る」を調べさせました。学校の辞典には「(花の色などが)照り映える。花の色で木が照り映える」と書いてありました。

つまり、「をとめ」や「照る」などの意味を古語辞典で調べ、解釈に活かすように助言しているのである。これは、自分たちの和歌読解の進め方のどこに問題があったのか、また今後どのように進めていけばよいのかを生徒に知らせるものとなっている。

以上のような助言を受けてGたちは、指摘された「をとめ」を調べ、それが詠歌主体の娘ではなく若い女性であることを確かめる(Yチャート傍線部分)。この段階でGは、最初に考えた心の「揺れ」が、古語の意味をもとに考えると妥当ではないと理解したと考えられる。

その上でGたちは、教師が指摘していない語についても古語辞典で意味を調べている。Yチャートには「園…草花などを植えるひと囲いの土地」と書かれているが(傍線部分)、こうした調査をもとに彼女らは、「春の園」という表現も『桃の花』『照る道』などの言葉と同様に「満たされた春の情景」を想像させるものであることを指摘しているのである。

このように、教師の助言により各語が古典世界で持っている意味に目を向けるようになった結果、生徒Eの解釈に変容が起こっていると考えられる。こうした助言は、生徒が「言葉への自覚を高め」、和歌を読解する観点を理解する上では重要であると考えられる。

## 5 おわりに

和歌を詠むとは、自分の心の「揺れ」にふさわしい言葉を探し求め、それを形にする言語活動のことである。そのため和歌の読解では、詠歌主体が自らの心の「揺れ」をどのようなものとして捉え描き出しているのか、そこでの言葉の選択や組み立てを吟味することが求められる。そこで本実践では、その方法としてYチャートを利用した。結果、生徒たちは和歌を読解するための観点、つまり和歌に描かれている「色」「情景」などに視点を定め、気づきを書き出すことで表現世界を豊かに読み取ること、さらには言葉の選択(「なぜこの言葉になっているのか」「自分が書き出した気づきは、特にどの言葉から読み取れるのか」)や言葉の辞書的な意味に目を向けつつ情景を想像してみることの重要性を学んだ。こうした読解活動は、各自が和歌を読解する観点を知るといふ学習であると共に、〈詠歌主体による言葉の選択や組み立てがもたらす効果〉について自覚化するといった、新学習指導要領が目指す「言葉への自覚を高める」学習になっていたと考える。

今回のようなYチャートを用いた和歌の実践については、附属中学校と協力して引き続き行っていきたい。

(以上、武久康高)

## 注

- 1 俵万智『短歌をよむ』岩波新書、1993、p86-88。
- 2 注1書、p130。
- 3 注1書、p129-133。
- 4 黒上晴夫「初等中等教育におけるシンキングツールの活用」『情報の科学と技術』67巻10号、2017。